

石垣の事

車橋の高七間七合五勺に、片面三尺の勾配、まつ八直も同然也、其直同前の高石垣を助るハ輪石垣なれども、輪之際に至て助るること成かたく、しかれハ石垣張出す恐最有、故に川幅拾間になし、双方二間七合宛、川中より築立

輪石をも包ミ、直の石垣五間三合ほとにな^{輪の懸橋の1}り、しかれども○石垣の○術手摺石ともには

十二間^半に成り、是を狂ぬよふに成すこと肝要の所、御矢倉台等拝見するに、規矩合目算にてハ及かたく、穴生方に問しに、近世事实に

携りし者なく、踏に成へき筈なく、所々功熟の石工に量しに、^{初代築米}規矩合を割出し

高六間を越築立し例もなし、其石組規矩にするべき石組に非ず、御新地水門脇の石垣口は一尺五寸計にして、長二尺六方角にて築立、釣合

故、本途の石組なるへし、勾配の事、高石垣の規矩とミへ、図面所持とし

ける、然れ共算規にも能かたく所、^{佐野 石垣 工部 右衛門、大工 原 幸次郎、}規矩合を割出し

御矢倉台の形、右の面々拝見するに、大凡其勾配也、其勾配を付けは

石垣張出すましく、其誤ハ築石長三尺にて尻二步太くなる故、張出

を防く事のと心得しに、反をつけ一間々々の勾配を割るに、下た

ほと勾配多く、倒れかゝりし道理にて、重りを裏築^{にも}に助^も也、下たほと

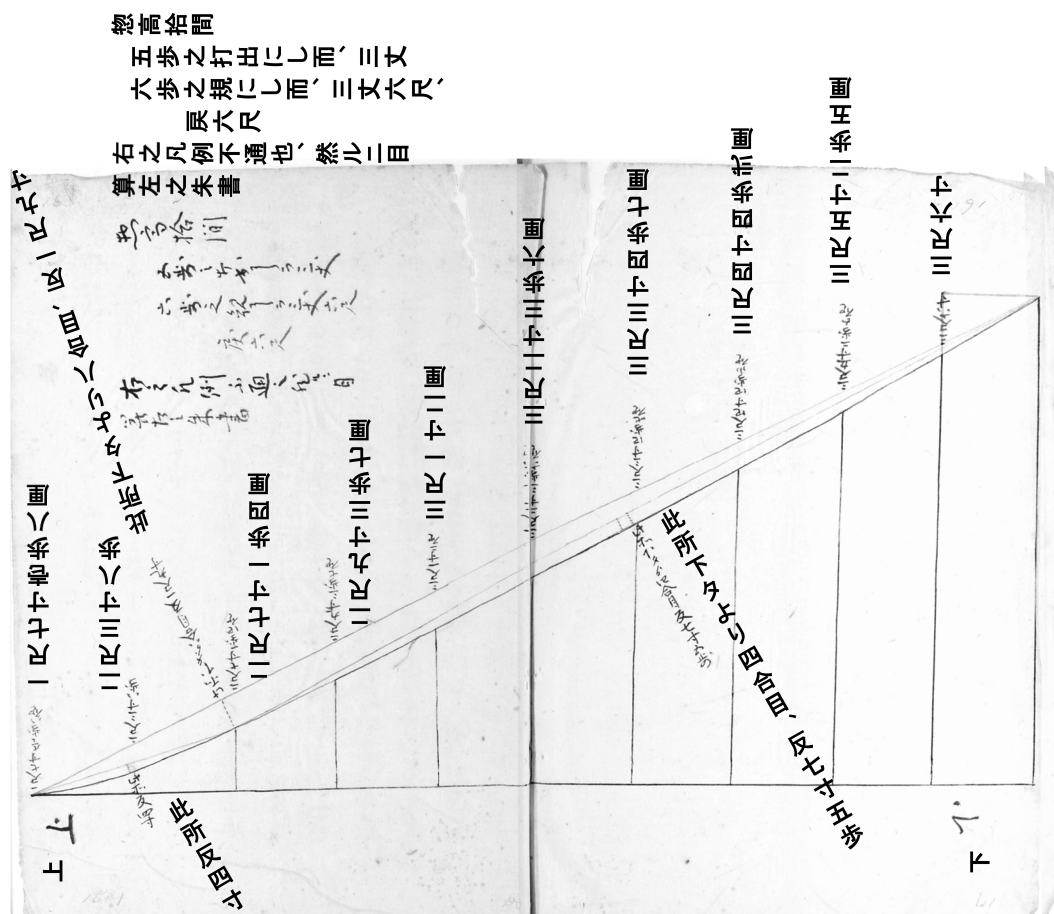
重り強かりしを助る仕法なるへし、又上二、三合目より勾配少く、

是ハ城乗を防事とミへしに、是も上への重裏築にうけ、下たの

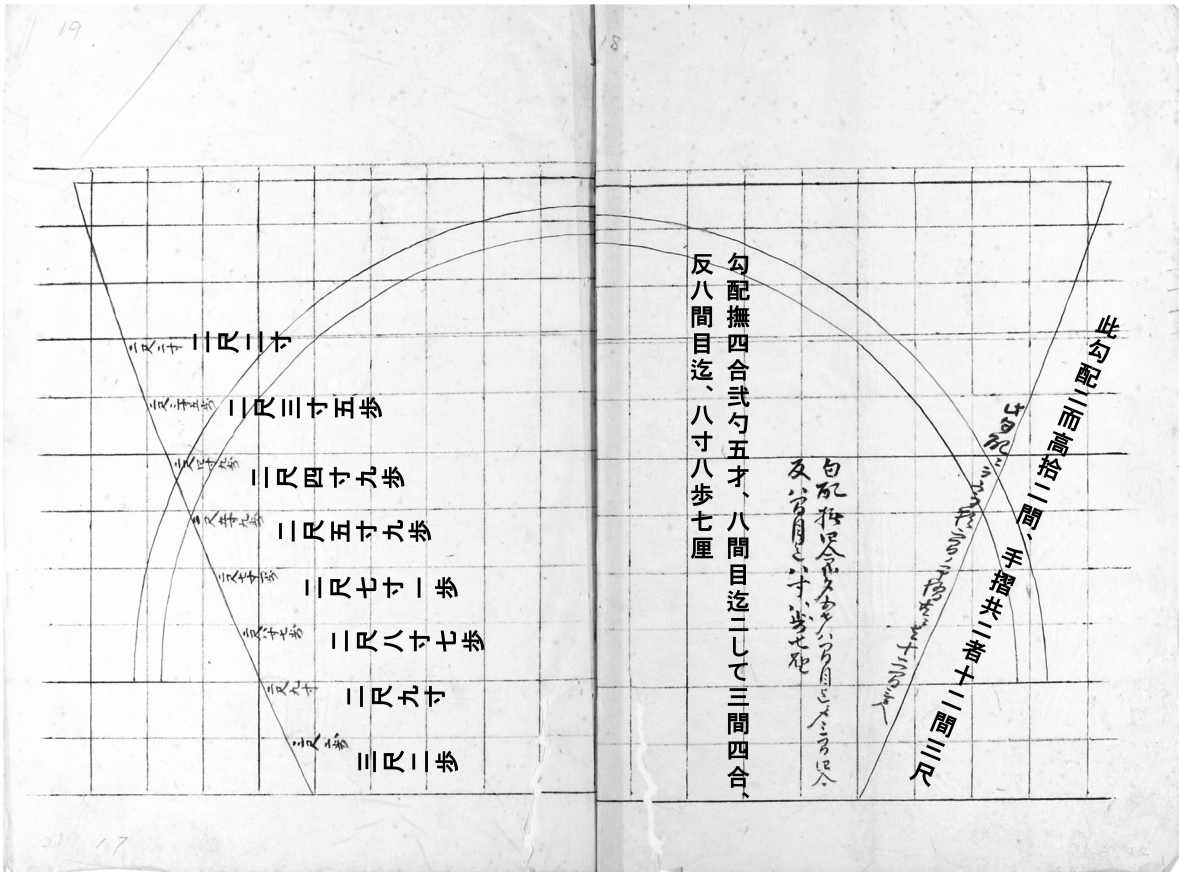
辛働^{働動}を助ることと見る、よつて裏築を念を入るへし、左の図に

頭す、

(挿絵七)

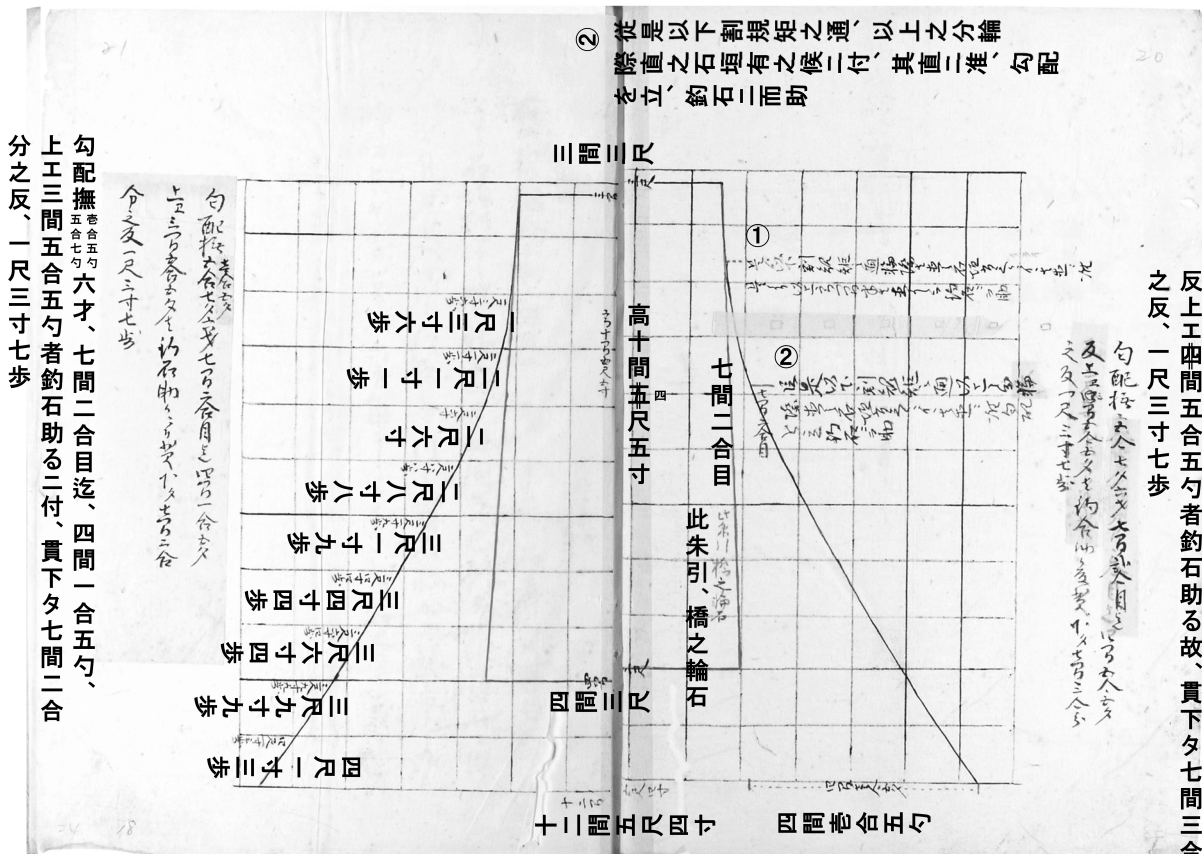


(挿絵八)



① 是より以下割規矩之通、輪際者直之石埋有之候二付、其直二淮、是より以上高一間半和直にして而釣石二間助

(挿絵九)

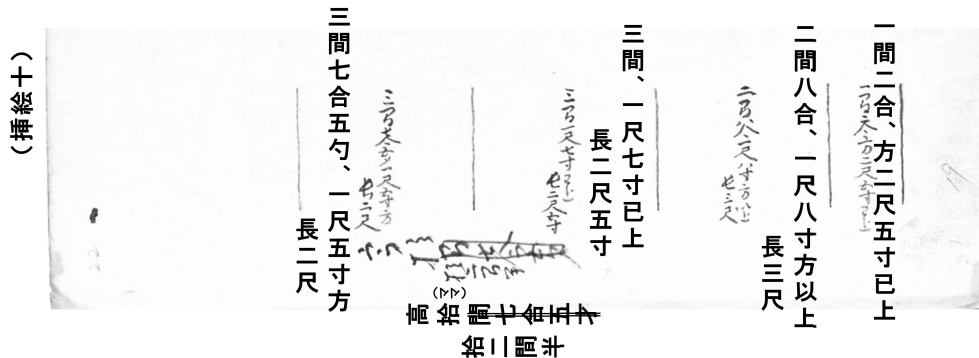


② 從是以下割規矩之通、以上之分輪際直之石埋有之候二付、其直二淮、勾配を立、釣石二間助

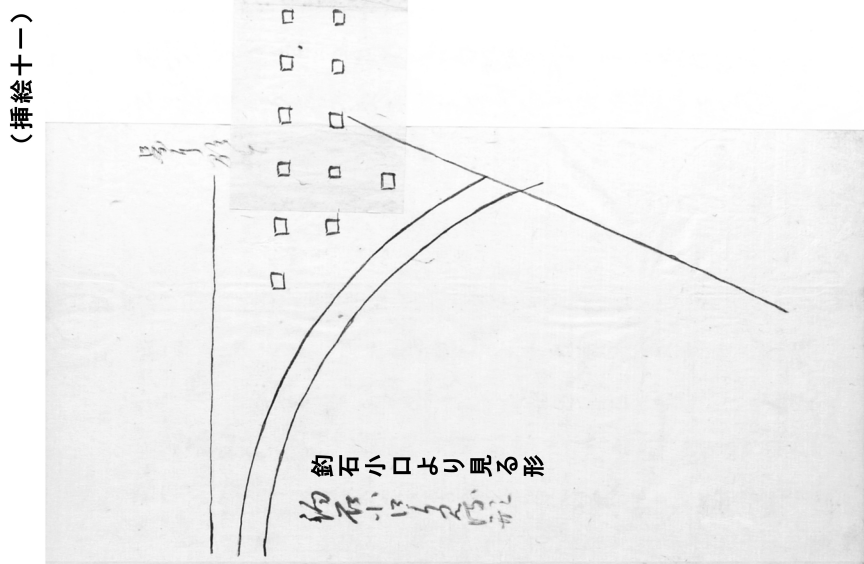
勾配撫五合七勺六才、七間式合目迄、四間五合五勺、反上五間五合五勺者釣石助る故、貫下夕七間三合分之反、一尺三寸七歩

勾配撫五合五勺六才、七間二合目迄、四間一合五勺、上五間五合五勺者釣石助る二付、貫下夕七間二合分之反、一尺三寸七歩

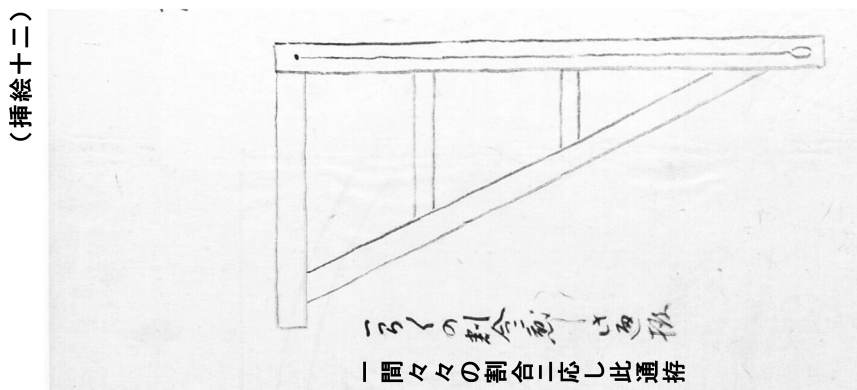
右の規矩合にて勾配のミ量るとも、築石飽なる時ハ勾配の詮なし、石垣破るゝ時ハ輪石のミ堅固なる也、頼ならず、築石に深く心を用、力を入ること肝要也、よつて築石柱合の選、云ふに及ず、聊のヒビキも貫き、六方角にして下たほと石太く長く、四段に取分築也、其取分左の図通り、



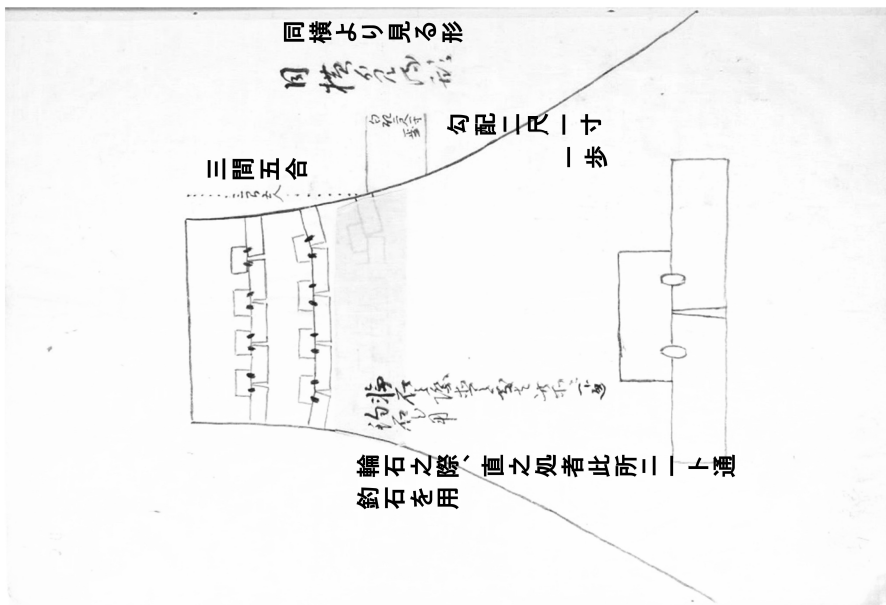
石垣下たより七間三合目までハ勾配築、夫より已上ハ直同様、夫と輪石の際高五間三合の直石垣には釣石を築、別註：一、巧也。 仕法左の図に願す、



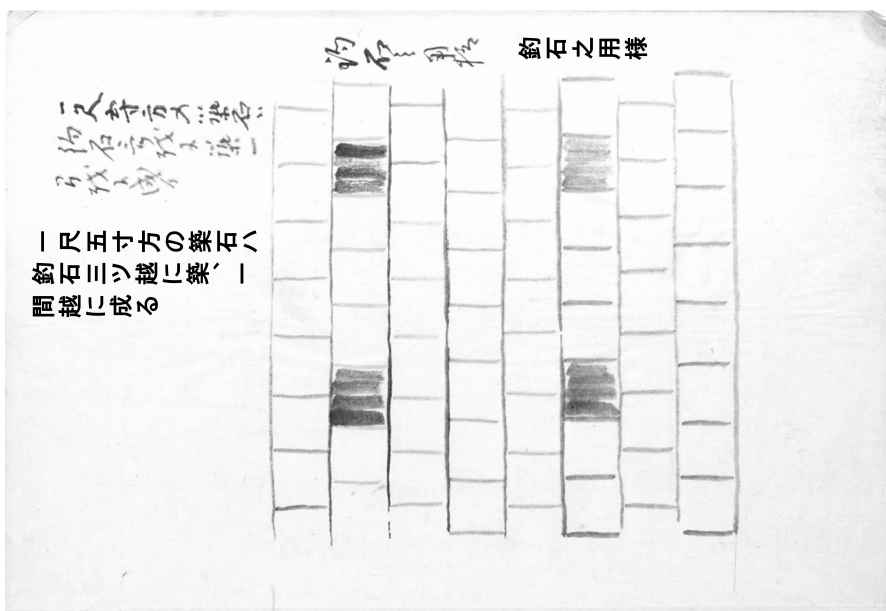
右の規矩をもつて小形を造り繩張をなす、司工兼十郎 一間々々の則規を拵、工頭も兼十郎 石工と一致に成て始終を遂、則図に願す、



(挿絵十三)

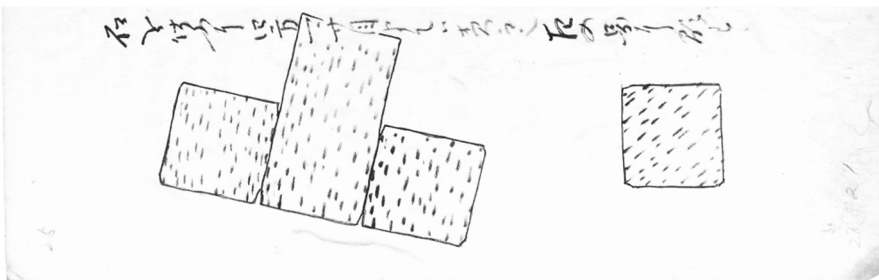


(挿絵十四)



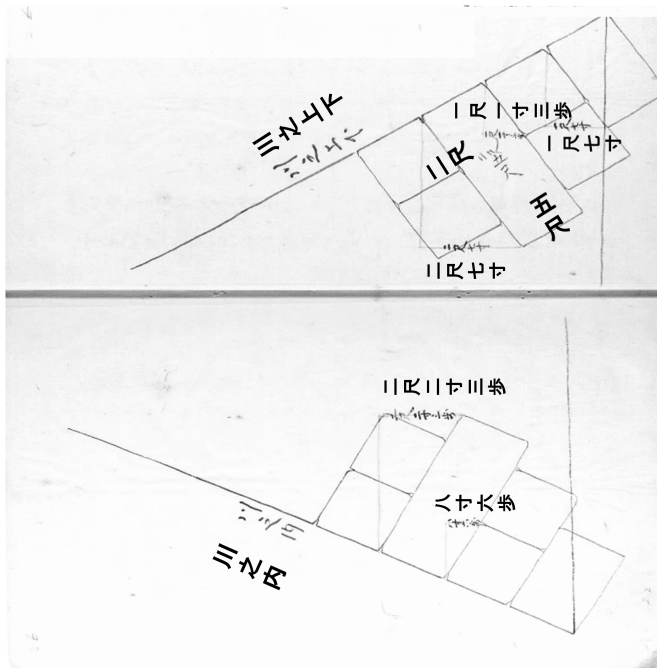
- 高き石垣ハ築合ツミわる故、口を明るに利有との是又坂梨某の説なり、よつて築石二尺五寸方以上、口を明ること四寸、二尺已下二寸五歩明る、
- 石の板目・マサ目の事ハ輪石の条に顕す通にて、たとへハ長五尺の石、矢目・板目者九枚、マサ目ハ七枚、夫にて強弱を知へし、不得止石を仕ふに四方マサ目にてハ責而也、左の図に顕す、

(挿絵十五)

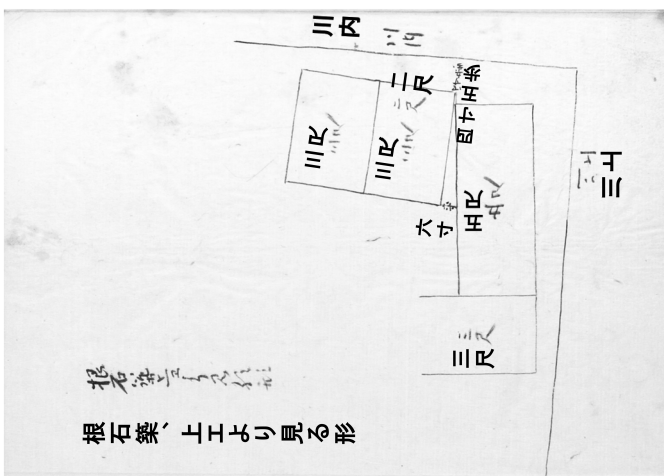


軸石垣の隅四ヶ所有、此隅石念を入ること也、築石同角にして長さ五尺打達に築、石垣石二尺角、下段の勾配分五の二間石の尻一尺一寸三歩低く故、地震にも石垣の面引込ミかつてに成る、割合左の図のとふり、

(挿絵十六)



(挿絵十七)



- 裏築のこと、丸石者強テ用へからず、割石三、四合已上を根一ツタ々に組合、片踏、又八角にて築合さぬよふに深心を用へし、鹿略なるときハ前条のとふりにて、石垣の狂に至る、第一者裏築高拾一間のうへに接互ル石榼聊も狂ふときハ漆喰離、通水しかたき故、重畳念を入る事也、
- 地橋崩しハ上段の柱、中英の柱五、六寸伐下、夫より双方のよふに伐下ケ、一躰に弛ミし時、石屑の懸を落、猶中英より双方のよふに二尺計伐とり、夫たけ一統に下りしうへ、柱四、五本に成よふ貫を伐、夫たけ外の柱や貫に障らぬよふに、かくらさんにて巻落す、是は津留村五兵衛受持て工風をす、